

ご感想、情報は・Eメール life@sankei.co.jp  
・FAX 03・3270・2424

Life

医

前回に続き、風邪と抗生物質についてです。

一部の医者はいまだに風邪に抗生物質を出すほうが良いと考えていたりします。抗生物質を要求する患者さんにとっては、抗生物質を出す医者の方が「患者の希望に応えてくれる良い医者」と思われている面があります。

こうした混乱した状況をいったいどう改善していけばいいのか、私自身も明確な対応方法があるわけがなく、困っているというのが現実です。

## 抗生物質不要の説明は難しい

医者が「抗生物質はいらない」と言っても、「いや、私の場合は抗生物質ですっきり治るんだから出してくれ」というようなやり取りはよくあります。こういう場合には、「風邪はウイルスで抗生物質は効かないんですよ」なんて理屈で説明したところでうまくいきません。患者さんの側に「風邪に抗生物質」みたいな「信仰」が出来上がっていることもあります。

これは、説明を理解しない患者さん側の問題だけではありません。風邪の60%に抗生物質を投与し、あたかも風邪に抗生物質が必要であるかのように仕向けてきた医者自身の問題でもあります。多くの医者が抗生物質を出す現状を無視して、口先だけで「風邪に抗生物質はいりません」と言っても、患者さんの信用を得ることは無理でしょう。

風邪診療は患者さんとの信頼関係を探る格好の道具だと思います。信頼関係がないとどんな説明をしてもうまくいきません。とりあえず私自身は風邪と診断して抗生物質を出さずに対応する場合、次のように説明します。

「今のところ風邪と考えていいと思います。抗生物質は不要です。このまま様子を見るのも一つの方法ですし、症状を和らげる薬を使うのも悪くありません。どうしましよう」

## 家庭医が教える 病気のはなし

86

患者さんが薬がほしいと言えば薬を出し、様子をみたいと言えばそうします。患者さんがどうしていいか迷っているようであれば、症状が軽い人には何もしないことを勧めますし、症状が強い人には症状がつかうときだけ使うように薬をお勧めします。

こんな説明が納得してもらえないようなら、患者さんとの関係が築けているのかなと判断します。ただ、納得してもらえないこともあります。これは残念ながら信頼関係が築けていないということです。私の場合、それでも抗生物質を出さないことが多いです。患者さんは別の医者に抗生物質をもらっているかもしれない。難しいものです。

武蔵国分寺公園 名郷直樹  
クリニック院長

## がん療養、実態把握へ

国立がん研究センターを中心とする厚生労働省研究班が、がん患者の療養生活の実態を把握するため、大規模な全国調査に乗り出した。平成24年に決定された現行の「がん対策推進基本計画」に沿って進められているがん対策の効果や進捗を明らかにし、今後のより良い対策に反映させるのが目的だ。

調査には、全国に約400ある「がん診療連携拠点病院」から選ばれた131施設が参加。各施設が24年の1年間に受診した患者から約100人ずつ無作為に抽出し、計約1万4千人に調査票を送る。このうち約700人は糖尿病や高血圧といったがん以外の病気で受診した患者で、がん患者の体験と比較するために答えてもらう。

## 拠点病院131施設の1万4000人調査、対策に反映

調査結果は厚生労働省のがん対策推進協議会に報告され、現行基本計画を評価する際の資料となる。

国立がん研究センターで事務局を担当する東尚弘・がん対策情報センターががん政策科学研究部長は「患者さんの意見は、正しいがん対策を導く上で一番大事です。この調査を通してぜひ、意見を言ってほしい」と協力を呼び掛けている。



がん患者に体験を尋ねる調査票の一部

特集 死に場所を選び  
ヒラでもわかる仕事  
産経新聞出版  
終読 活本  
ソナエ  
冬号  
¥840+税